

高等学校『倫理』における環境学習 —学習指導要領と教科書の記載内容の分析—

藤 岡 秀 樹¹⁾

Environmental Learning on the Subject “Ethics” at Senior High School :
An Analysis of its Course Guidelines of Study and the Contents of the Textbook

Hideki FUJIOKA

抄 録：高等学校の『倫理』において環境学習がどのように取り扱われているかを調べるために、1989 年度版と 1999 年度版の『倫理』の学習指導要領と教科書の記載内容を検討した。学習指導要領の記載内容に若干の差異が見られ、それに伴って教科書の記載内容にも変化が見られることが分かった。「酸性雨」「地球温暖化」「環境倫理」「世代間倫理」の 4 つの用語が、1989 年度版と 1999 年度版の学習指導要領に対応する『倫理』の教科書にキーワードとして多く用いられていた。

キーワード：『倫理』，学習指導要領，教科書，学習内容，環境問題

I. はじめに

高等学校では、地理歴史科の『地理 A』『地理 B』のみならず、公民科の『倫理』や『現代社会』において、環境に関する学習が行われている。地理歴史科での環境学習と公民科での環境学習では、そのねらいや視点も異なるが、現代的課題である「環境問題」を 1980 年代初頭頃から多面的に取り組まれてきたことは意義がある。本論文では、公民科の『倫理』で環境学習がどのように実践されているか、学習指導要領と教科書の記載内容の分析を中心に検討を行ってみたい。

II. 学習指導要領の分析

1. 1989 年（平成元年）度版学習指導要領

高等学校の学習指導要領は、小・中学校の学習指導要領と同様にほぼ 10 年単位で内容が改訂されている。現行の学習指導要領は 1999 年に改訂され、2003 年度から学年進行で実施されているものである。現行より一期前の 1989 年度版学習指導要領（実施は 1993 年度から）をまず取り上げてみよう。

1) 京都教育大学

1989 年度版学習指導要領では、大項目 (3)「国際化と日本人としての自覚」のなかの中項目ウ「世界の中の日本人」で、「環境問題」が取り上げられている。「世界の中の日本人」では、「人類の福祉と国際平和の確立、地球と人類社会などについて理解させ、国際社会における日本人としての在り方生き方を考えさせる。」と記されている。学習指導要領解説では、取り上げる内容と指導の在り方について、次のように述べられている。

「地球と人類社会」については、例えば環境汚染や自然破壊の問題などにおいて、今日では地球規模で人類の責任が問われていることを理解させ、広い視野に立って国際社会の日本人としての在り方生き方を考えさせる。

指導に当たっては、例えば地球環境に関する科学的な知見や、人間と自然の調和について哲学的探求を進めた先哲の考えを取り上げ、これらを国際社会における日本人にとっての課題という角度から扱うことが考えられる。

『倫理』において「環境問題」を取り扱うときには、自然科学や社会科学そのものの視点ではなく、あくまでも現実の実態を通して、国際社会の日本人としての生き方在り方を考えさせることが求められているのが見出せる。つまり、「環境問題」についての知識を豊かにさせることがねらいではないのである。また、地球環境に関する科学的な知見や人間と自然の調和について哲学的探求を進めた先哲の考えと、国際社会における日本人にとっての課題を結びつけて考えさせることもねらいとされている。

2. 1999 年（平成 11 年）度版学習指導要領

現行の学習指導要領である 1999 年度版学習指導要領では、『倫理』については、自己や現代社会の倫理的課題を主体的に追究し、人間としての在り方生き方について理解と思索を深め、生きる主体としての自己の形成が図れるようにすることに重点が置かれている。

1999 年度版学習指導要領では、大項目 (2)「現代と倫理」のなかの中項目ウ「現代の諸課題と倫理」で、「環境問題」が取り上げられている。「現代の諸課題と倫理」では、「生命、環境、家族・地域社会、情報社会、世界の様々な文化の理解、人類の福祉のそれぞれにおける倫理的課題を、自己の課題とつなげて追究させ、現代に生きる人間としての在り方生き方について自覚を深めさせる。」と記されている。

「現代の諸課題と倫理」の内容は、生命と環境、家族・地域社会と情報社会、世界の様々な文化の理解と人類の福祉、の三つの群に分けられており、三つの群から一つずつの課題を選択して学ばせるようになっている。今期の改訂では、『倫理』ではじめて課題選択学習が導入されたのである。そのため、全員が「環境問題」を学習するわけではない点にも留意したい。この課題選択学習は、学校選択とするか、学級を単位として選択するか、生徒個々の選択とするかは、各学校において、学校や生徒の実態等に応じて工夫することとなっている。

学習指導要領解説では、取り上げる内容と指導の在り方について、次のように述べられている。

「環境」については、人間と自然とのかかわりや自然観などについて、先哲の考え方や科学的な見方や考え方、知識を手掛かりにして考えさせ、科学技術の発達による光と影の両面について考えを深める。環境汚染、環境破壊、資源問題などについては、今日では地球規模の問題であるとともに、次世代以降の世代に対しても責任が問われている問題であることを理解させ、人類の将来にも責任をもって生きる態度を育てる。

1989 年度版学習指導要領と今次改訂の 1999 年度版学習指導要領とを比較してみよう。1999 年度版学習指導要領では、「科学技術の発達による光と影」について考えを深めるということが強調されており、「科学万能主義」的・「科学神話」的な見方に陥らないような配慮が見られる。

また、「環境問題」が、「次世代以降の世代に対しても責任が問われている問題である」ことを理解させ、「人類の将来にも責任をもって生きる態度を育てる」と記載されていることから、「世代間倫理」が重視されていることが見出される。

1989 年度版学習指導要領では、「科学技術の発達による影」の部分と「世代間倫理」については触れられていなかったが、1999 年度版学習指導要領では、これらに踏み込んでおり、より総合化された学習が期待されている。

『現代社会』においても、「環境問題」が取り上げられており、『倫理』での取り扱いとの差異について検討してみよう。1999 年度版学習指導要領では、大項目 (1)「現代に生きる私たちの課題」のなかで、「地球環境問題」「資源・エネルギー問題」「科学技術の発達と生命の問題」「日常生活と宗教や芸術とのかかわり」「豊かな生活と福祉社会」などのうちから、地域や学校、生徒の実態に応じて「二つ程度」取り上げることとなっており、『倫理』と同様に課題選択学習となっている。『現代社会』は、今期の改訂で、これまで 4 単位であったものが、2 単位に縮減され、内容の大幅な「精選」が見られている。『倫理』と同様に課題選択学習が導入され、全員が「環境問題」を学習するわけではない点にも留意したい。

現行の『現代社会』の学習指導要領解説では、取り上げる内容と指導の在り方について、次のように述べられている。

「地球環境問題」については、人間の様々な活動が自然環境への負荷を増大させ、その結果、地球環境の汚染や破壊が問題となっていることに着目させ、現在の世代のみならず将来の世代のために環境保全をどう図っていくかについて、我々人間の生活の在り方と関連させて追究させる。

指導に当たっては、例えば、地球温暖化の問題について取り上げ、それが化石燃料の大量消費など人間の様々な活動によって排出された温室効果ガスの増加が原因と考えられていること、その影響は、将来の世代にもかかわる長期の問題であること、また地球温暖化をめぐる考え方が国や地域、社会や生活の在り方によっても異なることを追究させ、温暖化防止のために必要な国際的な取組や協力とともに自らの生活の在り方について考えさせる。具体的な課題追究例としては、例えば、“私たちの生活と地球の温暖化”という課題を設け、身近な暖房や冷房を事例として取り上げながら、どのような資源に依存している

のか、地域や国の生活環境の違いによって暖房や冷房の仕方がどのように違うのか、地球温暖化に関わる国際的な取決めを実行すると日常生活における暖房や冷房はどう変わるのかなど、文化、経済、政治的な観点から追究させる学習などが考えられる。

『倫理』では、「環境問題」を学習するのに、先哲の考え方や科学的な見方や考え方、知識を手掛かりにして考えさせることが重視されているのに対して、『現代社会』では、具体的な課題を通して、文化、経済、政治的な観点、つまり人文科学や社会科学の視点から多面的に追究させることが重視されていると言えよう。

Ⅲ. 教科書の記載内容の分析

1. 旧教育課程（1989年度版学習指導要領）対応の教科書の分析

1997年に改訂された『倫理』の教科書（2002年度発行）の内、シェアの高い上位5社（5社で全体の約62%を占める）を取り上げる。記載内容の分析としては、キーワード、人名、書物、資料を取り上げることにする。キーワードについては、ゴシック体表示によるものに加えて、筆者が重要だと考えられる語を付加することにしたい。

（1）数研出版（『高等学校倫理 改訂版』）

「地球環境の破壊」と「開発と環境保全」の2項目からなる章（章名『人類と自然環境』）のなかで「環境問題」が取り上げられている。B6版2頁分が充てられている。

キーワードとしては、「温室効果ガス」「フロンガス」「オゾン層の破壊」「酸性雨」「南北問題」「国連人間環境会議」「国連環境開発会議（地球サミット）」が挙げられている。資料として、レイチェル＝カーソンの『沈黙の春』の一節が引用されている。

（2）東京書籍（『倫理』）

「かけがえのない地球」「生態系と人間」「環境倫理を考える」「自然との共存・共生の知恵」の4項目からなる章（章名『自然との共生に向けて』）のなかで「環境問題」が取り上げられている。B6版4頁分が充てられている。

キーワードとしては、「生態学（エコロジー）」「生態系」「連鎖・循環」「砂漠化」「地球温暖化」「オゾン層破壊」「酸性雨」「核兵器」「環境倫理」「共存・共生」が挙げられている。資料として、「バルディーズの原則」（要旨）が紹介されている。

（3）第一学習社（『改訂版 倫理』）

「宇宙船地球号」「人間環境宣言」「地球環境への共同責任」「わたしたちの課題」の4項目からなる章（章名『「宇宙船地球号」と乗組員』）のなかで「環境問題」が取り上げられている。また、テーマ学習として「世代間倫理」が取り上げられている。本文とテーマ学習を併せてB6版4頁分が充てられている。

キーワードとしては、「宇宙船地球号」「国連人間環境会議」「かけがえのない地球（only one earth）」「人間環境宣言」「国連環境開発会議（地球サミット）」「環境倫理」「世代間倫理」が挙げられている。資料として、レイチェル＝カーソンの『沈黙の春』の一節が引用されている。

(4) 清水書院（『新倫理 改訂版』）

本文では「環境問題」は扱われず、テーマ学習として「環境倫理」が取り上げられている。B6版1頁分が充てられている。

キーワードとしては、「世代間倫理」「国連環境開発会議（地球サミット）」「持続可能な開発」「循環型の生活」が挙げられている。資料として、レイチェル＝カーソンの『沈黙の春』の一節が引用されている。

(5) 実教出版（『倫理 新訂版』）

「環境破壊の進行」「環境倫理の問題」「環境の再生と人間」「エコロジーの地球像」の4項目からなる章（章名『環境の倫理』）と「世界的問題としての環境問題」「環境問題と人類の未来」の2項目からなる章（章名『地球環境と人類社会』）のなかで「環境問題」が取り上げられている。B5版4頁分が充てられている。

キーワードとしては、「環境破壊」「環境倫理」「共生」「宇宙船地球号」「持続可能な開発」「エコロジー」「酸性雨」「砂漠化」「地球温暖化」「オゾン層の減少」「熱帯雨林の減少」「Think Globally, Act Locally」が挙げられている。

資料として、レイチェル＝カーソンの『センスーオブ・ワンダー』『沈黙の春』の紹介と宮沢賢治の『狼森と策森、盗森』の一節が引用されている。

また、「環境問題」の先駆者として、安藤昌益、田中正造、南方熊楠が紹介されていることが他書にない点である。

次に、各教科書に共通なキーワードと資料を検討してみよう。まず、キーワードのなかで複数の教科書で取り上げられているものを列挙する。「オゾン層の破壊」「酸性雨」「地球温暖化」「砂漠化」「国連人間環境会議」「国連環境開発会議（地球サミット）」「環境倫理」「世代間倫理」「持続可能な開発」「宇宙船地球号」の10語である。

資料としては、5社のうち4社で、レイチェル＝カーソンの『沈黙の春』の一節が引用されている。

2. 新教育課程（1999年度版学習指導要領）対応の教科書の分析

入手できた新教育課程対応の教科書は、数研出版、東京書籍、一橋出版の3社のみであるが、旧教育課程対応の教科書と同じ観点で分析を行うことにしたい。

(1) 数研出版（『高等学校倫理』）

「現代の環境問題」「環境倫理」「環境問題の種類と原因」「環境問題へのとりくみ」の4項目からなる章（章名『現代の環境問題』）のなかで「環境問題」が取り上げられている。B6版4頁分が充てられている。

キーワードとしては、「宇宙船地球号」「生態系（エコシステム）」「環境倫理」「世代間倫理」「食物連鎖」「砂漠化」「地球温暖化」「酸性雨」「南北問題」「国連人間環境会議」「国連環境開発会議（地球サミット）」「環境基本法」「ダイオキシン」「Think Globally, Act Locally」が挙げられている。資料として、レイチェル＝カーソンの『沈黙の春』の一節が引用されている。

(2) 東京書籍（『倫理』）

「環境への視点」「環境問題の深刻化」「環境問題の加害者と被害者」「環境問題と倫理」の4

項目からなる章（章名『環境と環境倫理』）のなかで「環境問題」が取り上げられている。B6 版 4 頁分が充てられている。

キーワードとしては、「アメニティ」「生態系（エコシステム）」「宇宙船地球号」「沈黙の春（レイチェル＝カーソン）」「環境倫理」「地球の有限性」「世代間倫理」「自然の生存権」「かけがえのない地球」が挙げられている。資料として、「バルディーズの原則」とハーディンの「共有地の悲劇」（いずれも要旨）が紹介されている。

また、「環境問題関連年表」として 1953 ～ 1959 年の水俣病発生から 1997 年の地球温暖化防止京都会議までの 18 の国内外の事項について紹介されている。

(3) 一橋出版（『倫理—現在（いま）を未来（あす）につなげる』）

「地球の温暖化」「酸性雨の被害」「遺伝子破壊」の 3 項目からなる章（章名『環境』）のなかで「環境問題」が取り上げられている。また、事例として「1. なるべく電気を使わない生活にかえられるか」「2. 紙は白くないといけないか」「3. 人工化合物の氾濫」が挙げられている。問題提起を行い、生徒に考えさせる視点は、他書にあまり見られないユニークな点である。本文と事例を併せて、B5 版 4 頁分が充てられている。

キーワードとしては、「地球の温暖化」「化石燃料の大量燃焼」「熱帯雨林の破壊」「酸性雨」「遺伝子破壊」「環境変異原」が挙げられている。「遺伝子破壊」と「環境変異原」は他社にないキーワードであり、ユニークさが見て取れる。本書は、先哲の紹介や生き方・在り方に直接に触れた記述はなく、全般的に自然科学の立場からの記述になっていることが分かる。

取り上げた教科書は 3 社のみであり、考察に際しては慎重が必要であるが、各教科書に共通なキーワードと資料を検討してみよう。まず、キーワードのなかで複数の教科書で取り上げられているものを挙げてみる。「生態系（エコシステム）」「酸性雨」「地球温暖化」「宇宙船地球号」「環境倫理」「世代間倫理」の 6 語である。

複数社で取り扱われている出現頻度の高いキーワードとして、旧教育課程対応と新教育課程対応の教科書とで共通なものは、「酸性雨」「地球温暖化」「環境倫理」「世代間倫理」の 4 つである。他のキーワードも共通なものが幾つかあり、概して、旧教育課程対応と新教育課程対応の教科書の間に大きな差異は見られないと言える。しかし、説明の仕方・展開では、少し差異が見られ、新教育課程対応の教科書は、1999 年度版学習指導要領の趣旨を踏まえたものとなっていることが分かる。

資料としては、3 社のうち 2 社で、レイチェル＝カーソンの『沈黙の春』が紹介（そのうち 1 社は一節を引用）されている。旧教育課程対応の教科書でも、『沈黙の春』は多く引用されていたので、資料の選択の考え方（重要度）についても踏襲されていると言える。

IV. おわりに

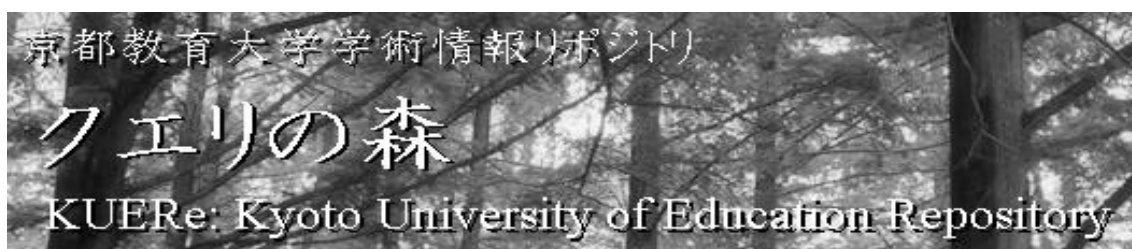
本論文では、高等学校の『倫理』において環境学習がどのように取り扱われているかを調べるために、1989 年度版と 1999 年度版の『倫理』の学習指導要領と教科書の記載内容を検討した。学習指導要領の記載内容に若干の差異が見られ、それに伴って教科書の記載内容にも変化

が見られることが分かった。

『倫理』の学習は、教科書をただ読んで進められていくものではない。現代的課題を認識するとともに、先哲の考え方を現代に照らし合わせ、人間としての生き方在り方を生徒に考えさせることが求められる。そして、豊かな授業実践を通して、生徒の理解が深まっていく。『倫理』における環境学習の授業実践については、別の機会に是非とも考察してみたいと考えている。

文 献

- 文部省．1989．高等学校学習指導要領解説 公民編 実教出版．
- 文部省．1999．高等学校学習指導要領解説 公民編 実教出版．
- 田丸徳善ら．2002．高等学校倫理 改訂版 数研出版．
- 平木幸二郎ら．2002．倫理 東京書籍．
- 式部 久ら．2002．高等学校 改訂版倫理 第一学習社．
- 菅野覚明ら．2002．新倫理 改訂版 清水書院．
- 城塚 登ら．2002．倫理 改訂版 実教出版．
- 佐藤正英ら．2003．高等学校倫理 数研出版．
- 平木幸二郎ら．2003．倫理 東京書籍．
- 高橋哲哉ら．2003．倫理－現在（いま）を未来（あす）につなげる 一橋出版．



この文献は、国立情報学研究所において電子化されたものを、本学でテキスト加工したものです。

